ぶ ら り わ が 街 宮 沢 界 隈

⑯　素朴な願いが今も続く信仰　ー　日限地蔵（ひぎりじぞう）

所在地（大神町3－14－10）奥多摩バイパス（都道211号線）の切り通しの坂を、立川（宮沢）方面から来て上がりきったすぐ左側にある地蔵堂です。大神町3－21－6にあったが、平成15年（2003）2月に移築された。この地域は文化8年（1811）の「観音寺分限帳」に、地蔵の森と記してあるように、古い時代から建立されていた。ひぎりとは「日限」のことで、信者が何日までに願いが叶いますようにとその間、毎日あるいは三日に一度といった具合に、日限をきって参拝する習わしのあるところからの名称です。

仏教の教えでは、お地蔵様（＊正しくは地蔵菩薩（ぼさつ）という。）は釈迦（しゃか）が亡くなってから、弥勒菩薩（みろくぼさつ）の出現する間（56億7千万年の間）、この世に現われて人々を救ってくれる菩薩といわれる。また、地獄に堕（お）ち、閻魔（えんま）の裁き受けた者までにも救いの手を差しのべる、心やさしい仏として、古くから庶民信仰の対象とされた。そのため様々な形の地蔵信仰がうまれ、名称も子育・子安・延命・勝軍・身代り・日限・とげぬきなどの地蔵と呼ばれて、各地に数多く祀（まつ）られた。

「ひぎり地蔵」のお堂の中には千羽鶴、提灯（ちょうちん）などが飾られ、前掛けや袈裟（けさ）を幾重（いくえ）にもまとった、三体のすでに顔面の剥げ落ちてはいるが、いかにも穏和（おんわ）な石の地蔵が祀られている。

この三体の地蔵は、それぞれに造立年代などの銘文が刻まれている。

（左側）ー最も古く、享保10年（1725）造立。造立者不明ー台座の銘文から父母妻子や先祖の霊をとむらい、あわせてこの世に生きる者の抜苦与福（ばつくよふく）を願って造立されたものとであることがわかる。

（右側）ー元文4年（1739）造立。大神村の以然という人ガ廻国巡礼の旅から帰村し、その無事成就（じょうじゅ）したことに感謝して造立したと思われる。

（中央）ー文化元年（1804）「大神村女講中　世話人幸助」が造立。造立の主旨は明記されていないが、「女講中」とは念仏講と推測されるから、極楽往生を願って造立。

この三体の地蔵が一緒にお堂に祀られて「ひぎり地蔵」と呼ばれているが、元はそれぞれ別個にあったものと思われています。お堂の中は座布団もありきれいに掃除されています。管理は、地域住民で組織される「日限地蔵講」によって行われ、毎月定期的に大掃除をして大切にお守りされている。

お堂の左側に、昭和11年（1936）造立の石碑がある。「　ありがたや　ひぎり地蔵を念ずれば　二世の代までも　まもるみほとけ　」と刻まれており、人々の信仰が厚かったことがしのばれる。

記　　防犯宮沢支部会計　西山　禎一